

令和5年度第2回 教育改革推進会議

新しい川崎市学習状況調査について

新しい市学習状況調査の結果を踏まえた
今後の方向性について

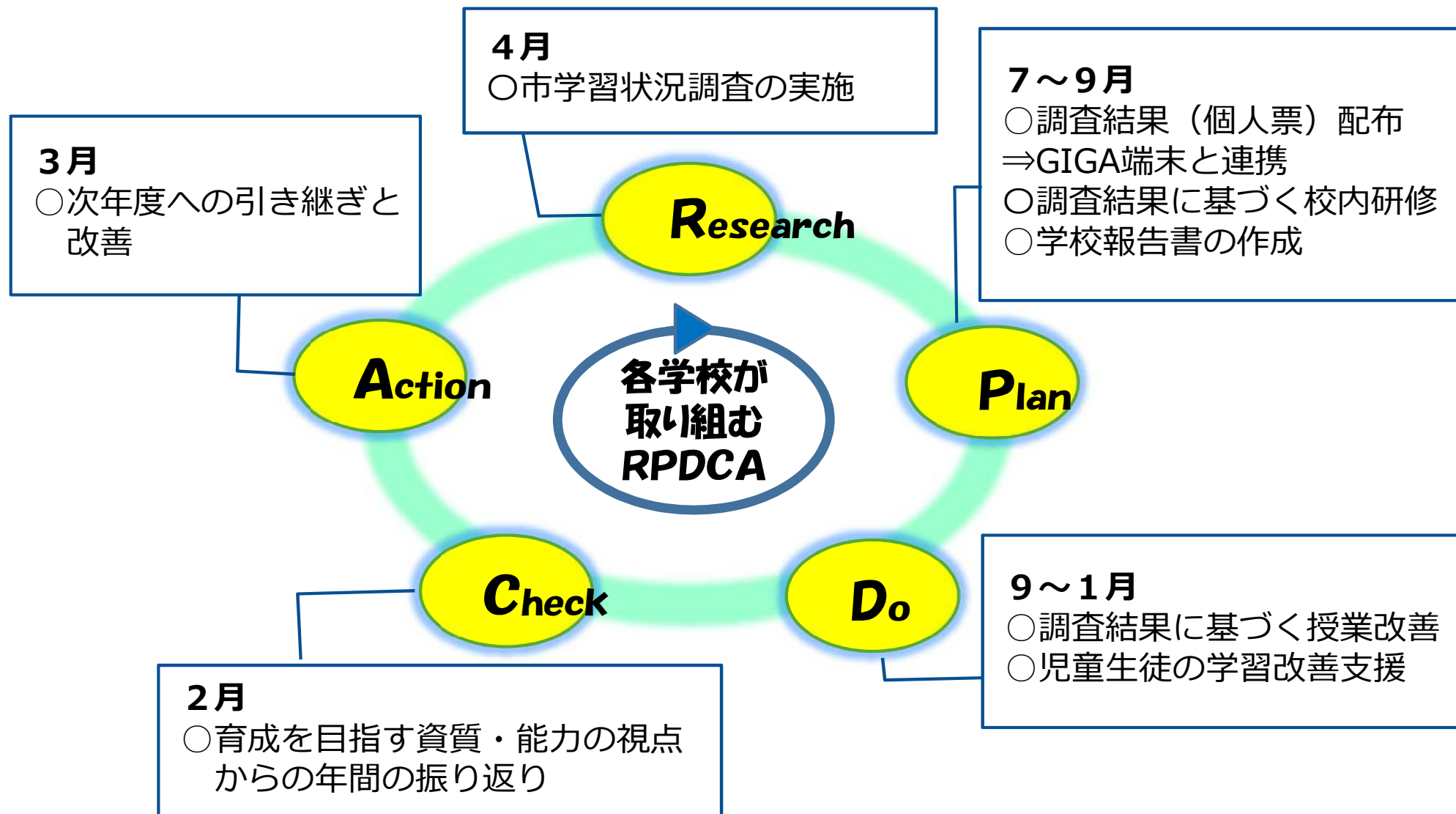
令和5年11月20日（月）

1 市学習状況調査の拡充

市学習状況調査の拡充の趣旨

- ✓ 変化の激しいこれからの社会において、各学校が授業改善や学習改善の支援に取り組み、個別最適な学びと協働的な学びをより充実させることが重要
- ✓ 学習状況に応じて授業改善や学習改善の支援の取組を進め、
教育活動の質の向上 と 学習効果の最大化 を図り、
児童生徒一人ひとりが、より『わかる』を実感できる授業づくりを推進する
ために 市学習状況調査を拡充

市学習状況調査の年間スケジュール



市学習状況調査とは

✓ これまでの市学習状況調査

実施時期	年1回（小5：5月上旬頃・中2：11月上旬頃）	
実施学年	小学校5年生・中学校2年生	
調査教科等	【小5】 ○国語・算数 ○意識調査（アンケート）	【中2】 ○国語・社会・数学・理科・英語 ○意識調査（アンケート）
出題方法	教科の課題に応じて教育委員会で作成	
調査結果の活用	結果に応じて、定着を図る問題と補充する問題を紙で提供 等	

新しい市学習状況調査では何が変わったのか

1 実施学年の拡充

実施学年を**小学校4年生～中学校3年生の6学年に拡充**！

2 出題方法の変更

「**IRT（項目反応理論）を用いた学力調査**」となり、毎年同程度の難易度で新しい問題を作成するため、過年度比較や経年的な変化を把握することができる。

3 分析方法の変更

「**学力調査と学習に関する意識調査への4層分析**」や
「**毎年実施することで、同一母集団における経年変化の分析**」が可能となり、より詳しい学力層別の傾向や状況が把握できるようになる。

4 GIGA端末との連携

個人の結果をもとに、**GIGA端末内の学習ソフトで自動生成された問題**に取り組めるようになる。

4 層分析とは

- ✓ 教科調査の4層分析は、川崎市の受検者を教科ごとに調査結果の高い者から並べ、上位から概ね25%ずつを、学力層としてA～D層（4層）に分割

（※意識調査の4層分析では、小は2教科、中は5教科の合計点でA～D層（4層）を分割）

- ✓ 学力層ごとに教科の平均正答率等を示して分析を行う。

【例】算数平均正答率及び4層分析（小学校）

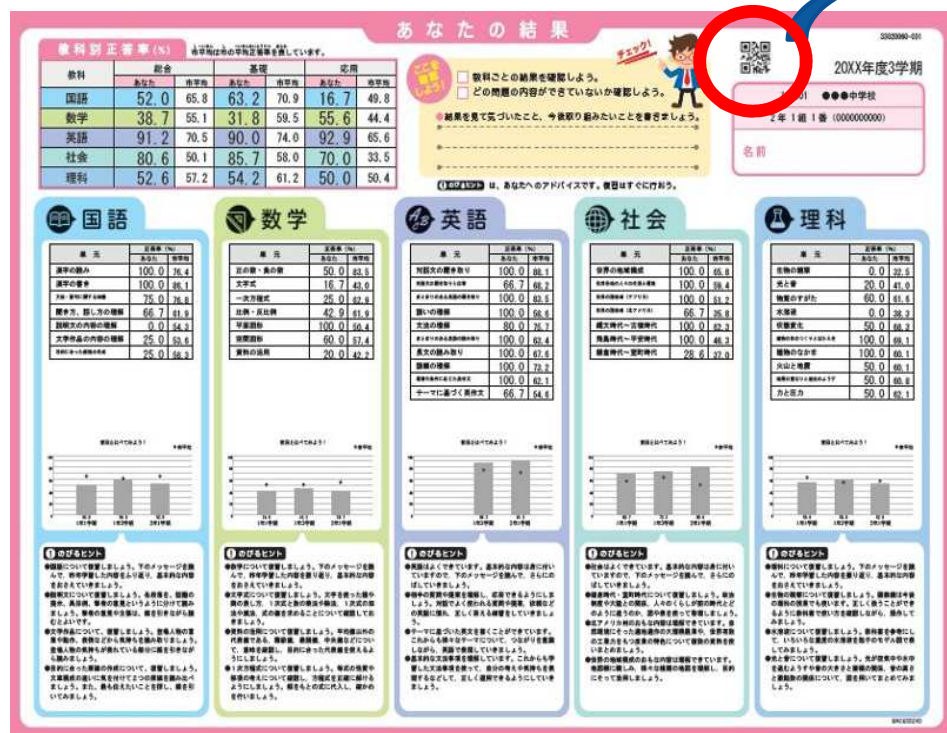
	算数の 平均 正答率	学力層別の算数の平均正答率				A－D層 の差
		A 層	B 層	C 層	D 層	
小4	69.3	91.1	79.5	66.7	39.8	51.3
小5	64.6	89.6	75	59.6	34.2	55.4
小6	62.7	90.9	74.1	55.5	30.2	60.7

市全体の平均正答率

上位から25%ずつの平均正答率

GIGA端末との連携とは

- ✓ 調査結果は、児童生徒一人ひとりに個人票として返却
- ✓ 個人票に記載された二次元コードをGIGA 端末で読み取り、学習ソフトと連携することで、自分に合った問題に取り組むことができる。



児童生徒に返却される個人票

学校・教育委員会・校長会における取組

教育委員会

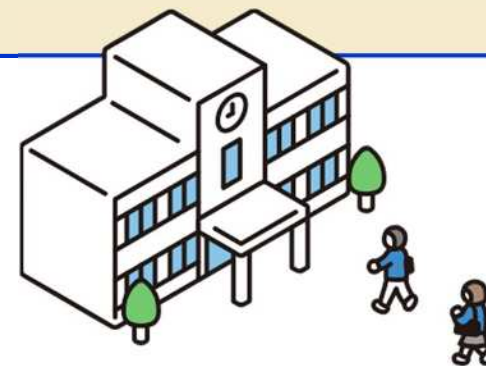
- ✓ 調査結果の分析に向けた学校向け研修や授業改善に向けた担当者会を行う。
- ✓ 全市的な児童生徒の学習状況を経年調査し、学習状況の把握・分析や、教育施策の成果と課題を検証することで、改善を図る。

学校

- ✓ 調査結果を分析し、個に応じた指導や学校（学年）での授業改善等を行う。

校長会・各研究（部）会

- ✓ 授業改善の具体的な手立て、個に応じた指導の手立て等を研究し、公開授業、研修会等で教員に提案



2 調査結果

令和5年度の市学習状況調査の実施結果

✓ 調査実施日

令和5年4月11日（火）～14日（金）の4日間から各学校が設定

✓ 調査教科等

小学校	教科調査	国語・算数 ※1
	意識調査	アンケート（136～139問）※2
中学校	教科調査	国語・社会・数学・理科・英語 ※1
	意識調査	アンケート（152～157問）※2

※1：各教科20～30問程度 ※2：設問数は学年により異なる。

✓ 調査の状況

市立学校167校、児童生徒合計63,083人に実施

小学校			中学校		特別支援学校	
114校			52校		1校	
小4	小5	小6	中1	中2	中3	合計
11,688人	11,893人	11,805人	9,482人	9,217人	8,998人	63,083人

教科別の調査結果（1/3）

小学校 （国語）

	国語の 平均 正答率	学力層別の国語の平均正答率				A－D層 の差
		A 層	B 層	C 層	D 層	
小 4	72.6	93.2	82.3	70.4	44.7	48.5
小 5	70.9	92.2	80.2	66.8	44.5	47.9
小 6	70.6	90.3	78.6	66.9	46.7	43.6

国語は、全体の平均正答率に着目すると、基礎的・基本的な内容は概ね身に付いているといえるが…

4層分析に着目すると、A層とD層の間には、40ポイント以上の差があり、大きな開きがある。

教科別の調査結果 (2/3)

小学校 (算数)

	算数の 平均 正答率	学力層別の算数の平均正答率				A-D層 の差
		A 層	B 層	C 層	D 層	
小4	69.3	91.1	79.5	66.7	39.8	51.3
小5	64.6	89.6	75	59.6	34.2	55.4
小6	62.7	90.9	74.1	55.5	30.2	60.7

算数は、A層とD層の間に50ポイント以上の差があり、国語も含めてD層に注視する必要がある。

教科別の調査結果 (3/3)

中学校（国語）

	国語の 平均 正答率	学力層別の国語の平均正答率				A-D層 の差
		A層	B層	C層	D層	
中1	71.3	91.4	79.9	67.6	46.4	45
中2	74	91.7	82.1	71.4	50.8	40.9
中3	73.1	91	80.7	70.1	50.7	40.3

中学校（社会）

	社会の 平均 正答率	学力層別の社会の平均正答率				A-D層 の差
		A層	B層	C層	D層	
中1	52.3	76.9	58.5	45.8	29.7	47.2
中2	48	73.7	54.1	39.9	24.5	49.2
中3	52.9	80.1	61.1	44.5	25.7	54.4

中学校（数学）

	数学の 平均 正答率	学力層別の数学の平均正答率				A-D層 の差
		A層	B層	C層	D層	
中1	67.3	91.5	78	63	36.9	54.6
中2	50.4	78.3	59.8	42.8	20.9	57.4
中3	49.5	81.3	60	40.5	16.3	65

中学校（理科）

	理科の 平均 正答率	学力層別の理科の平均正答率				A-D層 の差
		A層	B層	C層	D層	
中1	60.9	83.6	68.7	55.6	35.7	47.9
中2	51.7	76.9	59.2	44.1	26.6	50.3
中3	60.9	85.9	70.1	55.4	32	53.9

中学校（英語）

	英語の 平均 正答率	学力層別の英語の平均正答率				A-D層 の差
		A層	B層	C層	D層	
中1	75.5	91.8	81.4	72.6	56	35.8
中2	64.6	93	76.2	55.6	33.6	59.4
中3	63.8	92.6	76.8	55.5	30.2	62.4

学年を追うごとに開く
A-D層の差！

意識調査の結果 抜粋 (1/2)

①学習への理解度

Q あなたは、次の教科の授業が、どれくらいわかっていますか。
(国語、社会、算数・数学、理科、英語)

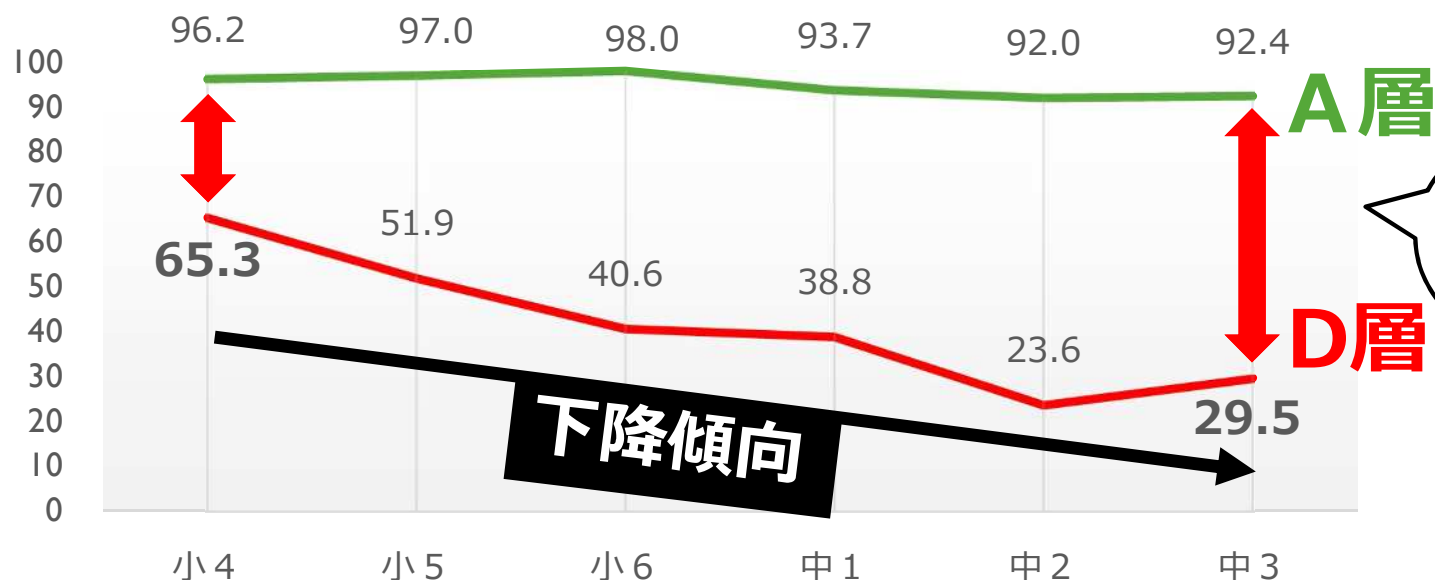


👉 A層の約9割が肯定的な回答をしている一方、

D層の肯定的な回答割合は、学年を追うごとに下降傾向にある。

※肯定的な回答とは…各設問に対する「よく～している」「まあ～している」とする児童生徒の回答

①学習への理解度【参考（算数・数学）】



意識調査の結果 抜粋 (2/2)

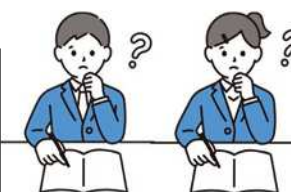
②学習に関する達成感

Q わからないことはそのままにせず、わかるまで努力している

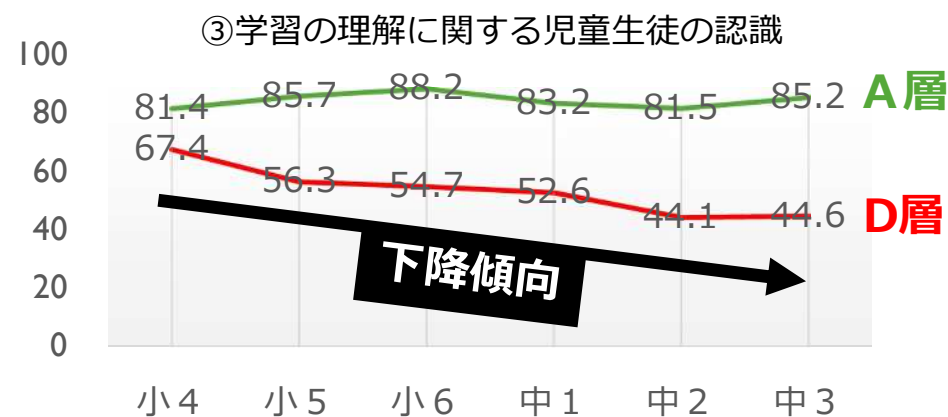


③学習の理解に関する児童生徒の認識

Q 授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている。



👉 A層の肯定的な回答の割合は、全ての学年で8割を超えている一方、
D層の肯定的な回答割合は、学年を追うごとに下降傾向にある。



3 今後の取組の方向性

市学習状況調査の拡充の成果

成果

➤児童生徒

- ・自身の学習状況を視覚的に経年で確認することが可能となり、今後の学習の見通しを持つとともに、振り返りが容易になった。
- ・GIGA端末内の学習ソフトと市学習状況調査を連動し、自身の課題に対して、いつでも主体的に学習することが可能になった。

➤学校

- ・調査結果をもとに、学校全体で学校教育目標の実現に向けた取組を実施
- ・多数あるデータから、児童生徒、学級、学年、学校の、より詳しい学習状況を把握でき、データに基づく客観的な授業改善が可能になった。

➤教育委員会

- ・調査の結果から、本市の特徴を詳しく把握することが可能になった。
- ・各学校の学習状況や重点項目が明らかとなり、学校支援のための客観的な資料を得た。

実施結果で見えてきたこと

D層の児童生徒の傾向

- ✓ ほとんどの教科調査で正答率が40%を下回り、A層との差が、学年を追うごとに開く傾向にある。
- ✓ 教科調査の正答率が低く、意識調査では「わかる」を実感できていない。
- ✓ わからないことを諦めてしまい、理由や考え方に着目できていない。



- ☞ よりきめ細かな指導や、市学習状況調査の結果を「根拠」とした授業改善を、教科調査と意識調査の結果から判明したD層の児童生徒の特性を踏まえて行っていく必要がある。

今後の取組の方向性（1/2）

学習状況調査の結果を生かした授業改善の視点として

1 「何がわかっていて、何がわかっていないか」について、児童生徒が自覚できるようにする。

- ①既習を活用する（見通し）
「わからない」「困った」を大切に
- ②理由や考え方に着目させる
「どうして」「なぜ」を大切に
- ③振り返りの充実
「そうか」「なるほど」を大切に

2 わからないことに対して諦めず、粘り強く取り組むために、ねらいを明確にしたペア学習やグループ学習をこれまで以上に大切にする。

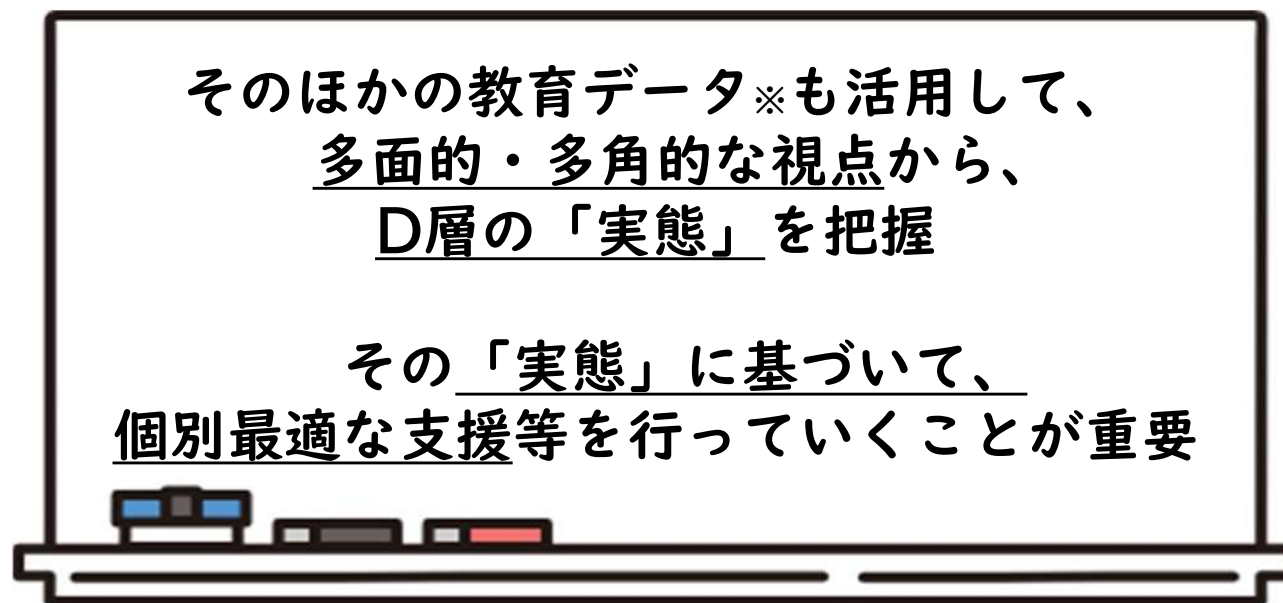
- ①題材、課題に向き合う
見る視点をもたせる。
- ②自分の考えをもつ
解決するための手段や方法をもたせる。
- ③友達と解決する
「わかった」という実感をもたせる。

3 いつでもGIGA端末等を活用して、学習に取り組める環境を整備する。

- ①児童生徒の自発的な取組
自分自身の課題把握と学習意欲の醸成
- ②保護者、家庭との共有
家庭学習の改善、充実
- ③GIGA 端末の活用
学校や家庭で学習ソフトなどの取組

今後の取組の方向性（2/2）

- ✓ 市学習状況調査のデータに基づき把握したD層の児童生徒の状況は、学習面に限らず、学校・学級ごとの状況や、個人の資質・能力、家庭等の環境など、多様な背景や要因があると考えられる。



※「そのほかの教育データ」には、「学習に関わる記録」や「生活・成長に関わる記録」が含まれており、これらは、いわゆる「スタディ・ログ」や「ライフ・ログ」と呼ばれているもの